7 評価

環境コミュニケーション

2022年8月22日(月)、富山大学との意見交換会をオンラインにて開催しました。(富山大学10名、東海国立大学機構20名が参加)

2017～2020年に岐阜大学と名古屋大学は、環境活動のさらなる発展や環境報告書の充実を目的に、4年連続で他大学との意見交換を実施してきました。今回は、東海国立大学機構として昨年に続き2度目の開催となりましたが、参加した3大学の学生7名からの積極的な発言も多く、大変有意義な意見交換となりました。

富山大学では、環境安全衛生マネジメント委員会のもと、環境マネジメント、化学物質管理、安全衛生の3分野における取組を実施していました。「富山大学環境塾」では、毎年テーマを設定し議論することで、環境問題を考え、交流する場としていました。また、教職員と学生の協働による環境内部監査を実施し、環境マネジメントシステムが適切に実施され維持されているかの点検を継続していました。3大学の参加者からは、学生の活動も含め、今後も情報交換を続けていきたいと感想がありました。

いただいたご意見は、本報告書に反映できる点は速やかに反映し、その他のご意見は次年度以降の環境報告書ならびに環境活動のさらなる発展に役立てていきます。

オンライン会議の様子

東海国立大学機構メンバーの集合写真

評価いただいた内容

- 非常に多くの学生が編集委員となり参画している点はすばらしく、参考にしたい。
- 学生インタビューによる研究紹介は、自身の専門分野以外の話を聞くことができ、視野が広がる。
- 卒業生の活躍を示すことで、卒業後の仕事が環境へ繋がっていることを再認識できる。また、記事にサブタイトルが付いていて読みやすい。
- 環境報告書をコミュニケーションツールとして利用していて新鮮に感じる。

改善提案を受けた内容

- Web版のみにする等、ペーパレス化を検討してみてはどうか。
- 環境報告書が学生に広く伝わってないように感じるため、周知するためのポスターの掲示など工夫するとよい。
- 環境報告書を通じた高校生との交流を検討されるとよい。
- インタビューを行う研究や教員を学生の意見を取り入れて選んではどうか。

参加学生のコメント

今回の富山大学の方との意見交換では、学生も積極的に関わっているという点を評価していただけました。しかし学生による内部監査や富山大学環境塾のお話を聞き、環境教育や学習の面で私たちの活動には改善の余地があると感じました。これからはただ活動するだけでなく活動で得たことを次に生かしていく姿勢を大切にしたいです。

▶名古屋大学農学部2年
中村拓海
(環境サークル Song of Earth)

環境報告書を通して、それぞれの環境活動について知ることができました。富山大学では、学生が内部環境監査や環境塾に参加しており、これからも情報交換など交流を続けていきたいです。現状、学生間で環境報告書はあまり知られておらず、Web版をダウンロードして読む人は少ないと思うので、環境報告書に興味をもってもらえるように工夫したいと思います。

▶岐阜大学工学部2年
片山義章
(環境サークル G-amet)

第三者評価

東邦ガス株式会社
CSR環境部
部長　森井（もりい） 定正（ただまさ） 氏

ご縁があり、東海国立大学機構の環境報告書に寄稿できることを光栄に思います。僭越ながら、企業にて環境課題への対応を担当する立場から所感を申し上げます。

まず、印象に残ったのが「機構長×学長×総長」の鼎談です。各組織のトップがご自身の言葉で、カーボンニュートラルに向けた取組について、語られており大変リアリティがあります。トップの意気込みが、以降のページにも伝播しており、全体を通じて、環境に関する取組への意欲の高さが伝わってきます。

環境研究の紹介では、「環境」をテーマとする研究分野が理系・文系を問わず、さまざまな分野に広がっていることを改めて感じました。各研究は一見全く異なる内容に見えますが、最大公約数的に読み取れるのは、「一つの分野だけでは解決が困難」「産学官の連携が大切」といったキーワードで、大学が知の拠点として産学官連携を推進する意気込みを感じました。予てから環境課題の解決には、さまざまな分野の叡智を結集することが重要であると思っており、大いに共感いたしました。産学連携のポイントはお互いをよく知ることだと思いますが、まだまだニーズとシーズのマッチングがうまくできていない事例もあるのではないかと思料します。今後、産学のコミュニケーションが活性化し、近い将来、産学連携の成功事例が本紙を賑わすことを期待します。

環境マネジメントデータの章では、INPUTとOUTPUTがイメージの沸きやすい定量データで示されて分かりやすいと思います。欲を言えば、INPUTとOUTPUTの間をもう少し工夫できるとなお良いのではないでしょうか。企業であれば、ビジネスモデルやマテリアリティ（重要課題）を記載することが多く見受けられます。加えて、OUTPUTの先にOUTCOMEがつけられるとさらに面白いと思います。定量的には難しいかもしれませんが、世の中のCO_2削減につながる研究成果や大学教育を通じた環境分野で活躍する人材の輩出といった記述が並ぶイメージです。

さて、東邦ガスは、2022年6月に創立100周年を迎え、次の100年をいかにして進んでいくべきかの指針として「東邦ガスグループビジョン」を公表し、その実現に向けた第一ステップとして「中期経営計画2022 ～ 2025」を策定いたしました。中期経営計画では、取り組むべきテーマの一つ目に「カーボンニュートラルの推進」を掲げ、当社グループが不退転の決意で挑戦すべき最重要課題に位置付けています。

当社がカーボンニュートラルへの対応を推進していくために、さまざまな知見を有する方々との連携は不可欠であり、大学も重要なパートナーだと考えます。とりわけ、環境課題解決に向けた技術・フレームワークの社会実装の主導やGXを推進する人材の育成に期待しています。アカデミック・セントラルの最上位概念である「勇気をもってともに未来をつくる」は、大学のみならずカーボンニュートラルを推進しつつ持続的成長を図ることを重要課題に位置付ける多くの企業が共感できるメッセージだと思います。

本稿に目を通してくださった方々とともにワクワクする未来をつくる仕事ができる日が訪れることを心待ちにしています。貴機構の益々の発展を祈念いたします。

100th anniversary

未来を、一緒に、ずっと豊かに。
東邦ガスグループビジョン

▶ 東邦ガス株式会社
https://www.tohogas.co.jp/

▶ 東邦ガス株式会社「統合レポート2022」
https://www.tohogas.co.jp/corporate/ir/document/integrated/